

広島・三日市遺跡

- 1 所在地 広島県世羅郡世羅西町大字黒川字三日市
- 2 調査期間 一九九〇年(平2)十一月～一九九一年二月、一九九一年四月～一〇月
- 3 発掘機関 ㈱広島県埋蔵文化財調査センター
- 4 調査担当者 金近忠昭
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 中世後期
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(乃美)

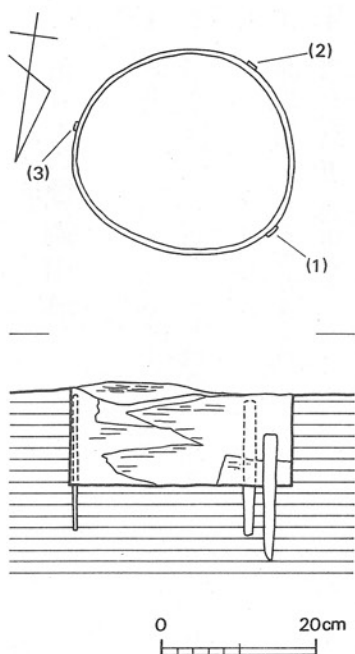
三日市遺跡は、広島県中部に広がる、世羅台地と呼ばれる起伏の比較的なだらかな山間の地域に位置している。遺跡は、現在は水田となつているなどらかな斜面上にあり、すぐ北には江の川の支流である美波羅川が西流している。遺跡の存在する世羅郡には中世初頭に太田荘が成立するが、三日市遺跡は太

田荘域には含まれておらず、当時の様子は明らかにされていない。

遺跡の調査面積は約五〇〇〇㎡である。掘立柱建物を想定させる千以上の柱穴を検出した。柱穴は密集している所が数カ所あり、建物が近接して建てられていたことや、何度も建て替えられた様子が窺える。建物の規模は一間×一間や一間×二間のものが多い。柱の間隔も一定しておらず、二～四mと広いものが多い。瓦は全く出土しておらず、瓦葺きの建物はなかったと考えられる。出土遺物には、土師質土器、陶器などが多く、輸入青白磁も若干含まれている。他に、漆器椀、木簡、曲物、輸入銅銭、刀剣などが出土した。これらの遺物から三日市遺跡が成立・存続した年代は、一四～一五世紀であると判断できる。

このような遺跡のあり方や、遺跡のある地域が「三日市」という地名であること、四方に道が通じて往来に便利な場所であったこと、調査区の北西部に恵比寿信仰の跡が残っていることなどから、三日市遺跡は中世後期の市の跡であると推定される。

木簡(呪符)は、土中に埋められた曲物の外側に接して、立てられた状態で出土した。曲物の径は二七～二九cmで、円形に近い。本来は円形であったものが土圧で変形したものであろう。曲物を埋めた穴は曲物の外径にほぼ等しい。曲物の上部は削平を受けているため高さは不明である。底板はなかった。埋土は灰褐色粘質土で炭化物の小片を少し含んでいた。いずれの木簡も薄い板状で、文字の書



呪符出土状況図

それぞれ一字目は梵字であることを確認した。(1)は真言密教の偈文から「□迷故三界城」となる。呪符の配置は、(1)が曲物の西、(2)が南、(3)が東にそれぞれ立てられていた。その配置をみると三方に立てられたようにみえるが、このような状態から考えると、他に「□何処有南北」と記されたものが曲物の北に立てられていた可能

いてある方を外側にして立てられていた。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「□迷故□□□」

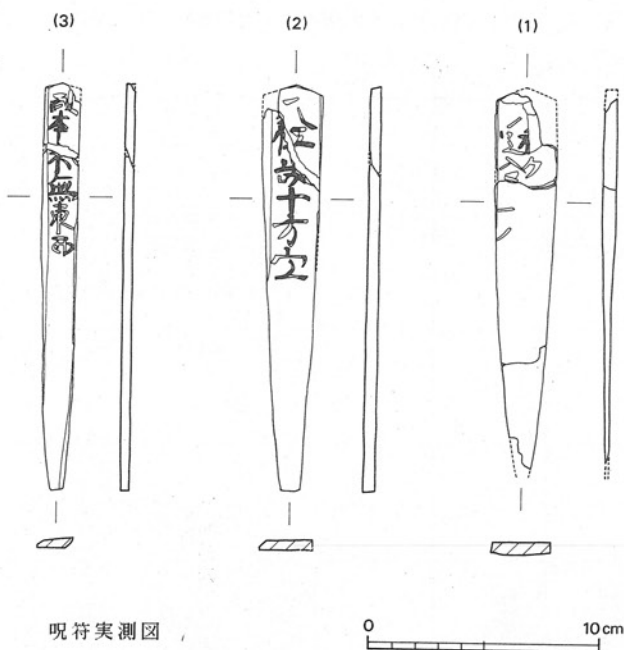
(166)×27×5.5 051

(2) 「□悟故十方空」

179×26×5 051

(3) 「□本来無東西」

179×11×5 051



呪符実測図

性がある。遺構の性格については、死者への供養とか地鎮などが考えられるが、他に手掛かりになるような遺物が出土しておらず、明らかではない。

なお、呪符の解説については、広島県立歴史博物館の志田原重人氏の協力を得た。

(金近忠昭)